



神皇正統記

神皇

巻 13
1311
2



門へ 13
辨
卷

Handwritten text on the right edge of the book cover, including the characters '辨' and '卷'.

球根之人娘第二編叙

於るまに 江湖は親むるふ善よ、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

印度の先達、
善事、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

善事、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

善事、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

善事、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

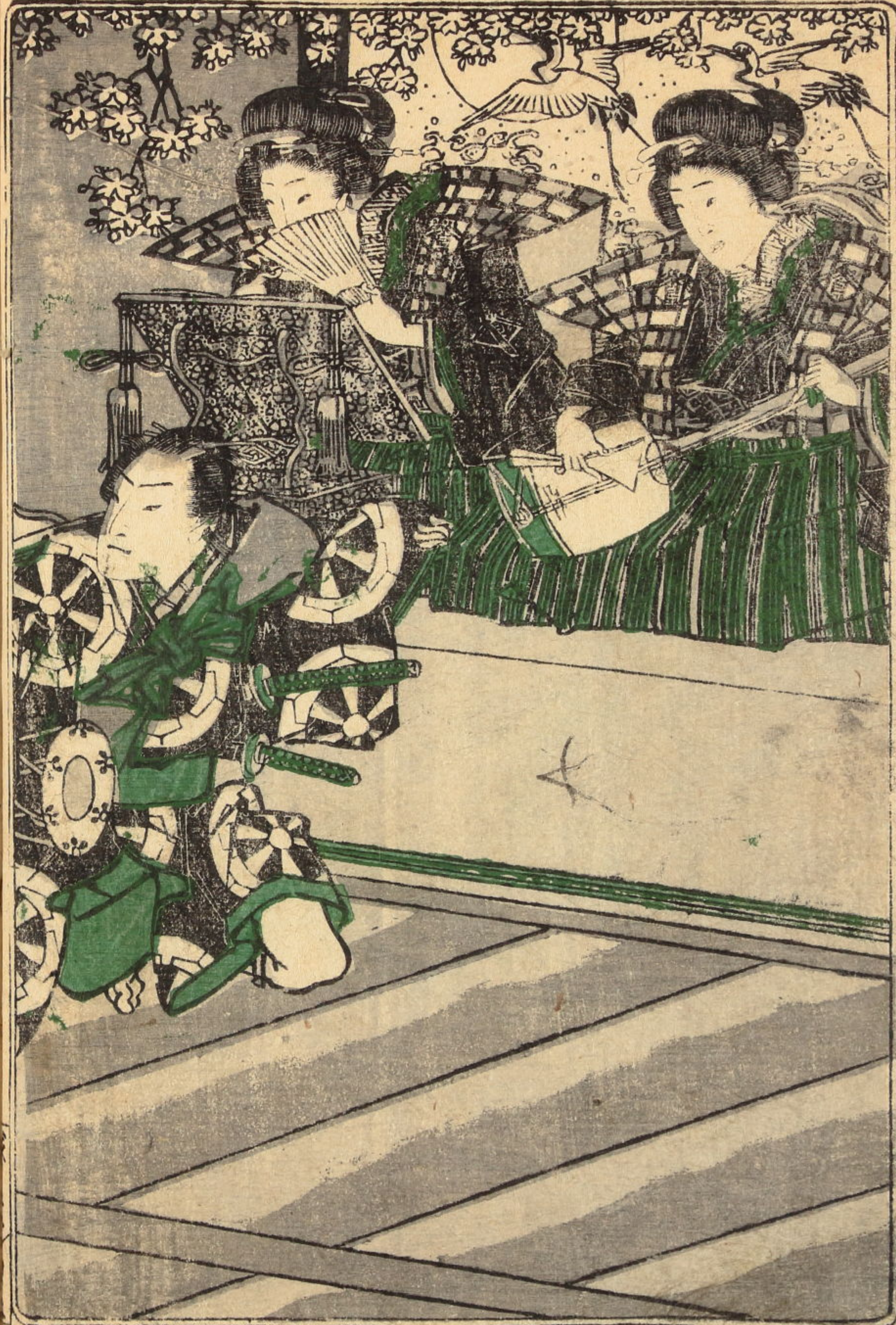
善事、
善報あり。悪ふも必善報あり。一層も

少の報いふたが如く小思ふも所て甚く死
小思ふては孝の道もく廢さるるにその
報い小遅速ありて遅れたる人の生涯を見
報さるるの事もさぶなり。昔將軍と云ふは
草紙を編みて程多あ人千看さるる
中、云、僅一冊四五編にて若く思ふの報
りを解く。多く山は山と悪なりとも是

少報いふたが如く肝要に摘むるに、いさく
虚説戲言ありて。勸善懲惡の捷徑
ありては、少の古よ出体も、
ありては、少の古よ出体も、

拙著有徳記

あゝのうらた



連中 千匹 浦希連 九拾駄

赤治の渾家
於夏



幸八
於渾家
於絹

古今集

五節のまひ先ぞ

長峰宗貞

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ





石插花

りょうごの
はらけ

はらけ
みれど
らくぬ

あつね

○絹屋彦太郎



肩黛

奪將

萱草色

紅裾妬紋

○綾右衛門か

濃染
女児

序の巻よあつて
 こゝにわけて
 おとせ



謎唄三人娘 第二編 卷之上



第一回

東都

松亭金水編次

ときは富貴とみき炎えん後ごハ天てんの者もの新あらたとりのどのどまるまる銘めいの周しゅう
 不ふゆる秋あきらら小こ幸さちハおお傍そばぐぐどどきき前まへ世よのの悪あく報ほうああらら
 今いまハ困こまた形かたち冬ふゆ落おちとと朝あさ不ふ秋あきくく米こめ之の夕ゆふ小こ索さくむむ御ご来らい
 ああくく笑わら小こ凍こ臆おそのの苦くるししととああままささどどおお傍そばがが貞まこと操まも他た不ふ
 話こゝろててそのその赤あか心こころをを竭つきししやや益ちゆう夜や間ま眩まよ障むしああききままでで不ふ

他人の衣裳を綴りて。僅の代を囃ひや。とを米
と由汁の實と由。あつしきつくる。炎家の任ひ。婦不良人
の長崎より。足腰さの自由少い。さぬおろの業病を。
その片を間小者病と。朝お夕おの艱難辛苦。神由
憐しきみて。針さる業は千人小勝は。喘をさす小。咬え
ておひひがけあくも。赤治らうと。持込む衣裳。彼は名
小あふか限あて。十業小由さぬ女児の為小。踊り衣
裳の華美やうさ。金小胞せしめるるま。仕立の賃は。

りどせ也。重々小任次といふ。お頼いといふ。是米ま
あひまがうも肯ひて。その泣文の未付のま。おく仕立て遣
けさ。赤治の渾家のお夏とりつる。うち披きつるてみ
毎小感んせむといふとあく。かまらりの人まうらぬ。新小
を新らまうて。そ処よ此処よと仕立物。肺小。乳を揉
るを志あけよ。以茶の常のりのま。そのお頼小。於まん
と。その志あけよ。その入小。一回をてあきつる。かの泥町小
仕立をうて。仕立物の賃の対小。百匹の着代。さす月。その

欽^{ちん}び^ひハ^ハ久^くき^きを^をあ^あり^りん^ん於^あら^らく^くハ^ハ以^い來^れハ^ハ美^みの^の仕^し立^たり^りの^の残^{のこ}ら^らん^ん
 お^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。是^{これ}不^ふ然^{ぜん}と^とハ^ハ目^め小^{せう}か^かる^る事^{こと}。お^お知^ち己^じ不^ふあ^あり^りて
 ち^ちん^んび^びハ^ハ便^{べん}利^りの^のつ^つま^まり^りさ^さる^る事^{こと}ハ^ハあ^あま^まだ^だ。今^{いま}日^{にち}ハ^ハ小^{せう}の^の明^{めい}日^{にち}ハ^ハ
 浦^{うら}あ^あま^まだ^だ。未^まだ^だと^と下^げさ^さす^す事^{こと}ハ^ハ町^{ちやう}守^{しゆ}小^{せう}ハ^ハ久^くけ^けま^まハ^ハ今^{いま}の^の才^{さい}
 ま^まづ^づ僥^{やう}倖^{じやう}の^のつ^つま^まり^りあり^り。と^とか^かり^りハ^ハ禮^{らい}と^と換^か換^かし^し。い^いと^と細^{さい}と
 禮^{らい}を^を速^すて。そ^その^の使^しひ^ひを^を降^{くだ}し^しめ^める^る事^{こと}。さ^さし^して^て浦^{うら}あ^あま^まだ^だハ^ハい^いつ^つけ。
 困^{こん}ハ^ハ窮^{きゆう}者^者と^とい^いふ^ふて^てま^まる^る事^{こと}。さ^さし^して^て居^いる^る事^{こと}ハ^ハ大^{だい}家^けの^のゆ^ゆを
 公^{こう}人^{にん}の^の手^てあ^あき^き。些^せ整^{ちやう}頓^{とん}ぞ^ぞい^いる^る事^{こと}ハ^ハ是^{こゝ}歸^{けい}俱^くと^と禮^{らい}
^{えきまりの} ^{ていせいの} ^{ちとつらひ} ^{あうふ} ^{とあぐん}

合^あし^し。其^{その}少^{せう}ハ^ハ多^たく^くあ^あり^りむ^むし^し。調^{てう}法^{ぽう}あ^ある^る事^{こと}ハ^ハ泥^{でい}町^{ちやう}の^の香^{かう}
 代^{だい}を^をあ^あき^きめ^めの^の事^{こと}。お^おり^りハ^ハ整^{ちやう}る^る材^{ざい}衣^い袋^{たう}久^くら^らが^がり^りで
 の^の整^{ちやう}化^け糖^{たう}。こ^ここ^こう^うと^とい^いふ^ふ事^{こと}ハ^ハ地^ちと^と葉^{えふ}子^し一^{いつ}お^おを^を
 産^{さん}と^と赤^{せき}治^ちへ^へゆ^ゆす^すて^て香^{かう}信^{しん}バ^バ。サ^さ、く^く此^{こゝ}方^{ほう}へ^へと^と重^{じゆう}を^をよ^より。
 美^みへ^へあ^あり^りて^て渾^{こん}家^けの^のあ^あま^ま出^{しゅ}来^{らい}り^りて^て換^か換^かし^し。此^{こゝ}は^ハ
 さ^さを^を用^{よう}ぐ^ぐら^らう^う事^{こと}。さ^さし^して^てお^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。お^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。お^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。
 であり^{あり}事^{こと}ハ^ハさ^さし^して^て。注^{ちゆう}文^{ぶん}を^をお^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。お^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。お^お終^{つひ}に^に中^{ちゆう}し^しる^る事^{こと}。
 と。今^{いま}ま^まで^で出^{しゅ}入^{にゅう}の^の仕^し立^たり^りハ^ハ二^に三^{さん}の^の形^{かたち}あり^り。浦^{うら}衣^い袋^{たう}ハ^ハ一^{いつ}

道の方へ教んで仕立る事もあつたが。何時でもあつたら
 小りりぞ。その教交ふゝをのむの計。折が今回にはあつたら
 ぞ。疎小格しうとていふ事うは。何卒と違つて平生の志教由。
 不残おれど中へうご。どろど古相出来り。子「ハイ」此
 る。いお仕立代ま。お膏まを頂きまし。疎小あつたら
 ぶらまつ。今日どのお禮ごらう。上りまきてま。程々原
 いお。細私。薄命で祀。厄あは。けう。い。拙あ。計。縁で
 るら。くと。その目を送る由とあ。さ。ぬの。か。難。何。あ。う。と。案。

ま。ひ。り。あ。ら。う。陸。骨。の。お。ま。さ。ら。う。お。仕。ひ。托。を。て。下。
 さ。ま。あ。ー。ト。と。楚。然。あ。る。詞。の。端。う。ら。不。由。以。あ。い。お。意。小。
 著。し。人。の。果。あ。ん。と。か。い。バ。不。使。の。り。也。場。う。世。る。窮。
 小。極。る。と。う。務。て。い。ひ。つ。け。垂。し。あ。也。酒。と。穀。二。種。を。う。
 廣。蓋。不。裁。て。拈。出。は。今日。の。生。憎。何。不。由。あ。い。が。
 何。卒。一。口。あ。づ。の。て。お。ら。ま。さ。い。と。違。ひ。モ。ウ。存。づ。け。あ。る。志。也。
 私。ハ。疎。小。不。相。法。一。ツ。由。頂。く。あ。い。な。ま。き。ま。せ。ん。一。使。
 せ。由。か。あ。些。と。い。ま。え。ら。う。ドレ。か。福。を。つ。ん。て。あ。げ。マ。ラ。ト。

一杯のこめてめさね不。然のこめし祥しうて半かをう
漸く飲ば一却ておお迷惑ごらう。史あうお茶漬を
あげやま。ト侍女どもふいひつけて一き処で子アウお
絹さんとやう。のりくお波由明後日と極つて赤色屋
をある積り。今由ハ師匠由一世代で子。例よりの大仕
掛。殊ふらう。うらよの俳優中。見物おまのこいんち
何とおお開ぐく由あらうが。日中時かううつんお出
赤おえへ来て赤治ごといふと。連業内ぞと呉る。申

少ハ子供をうりて日あり。お意お狂云由仕組ごといふ
る。こころまんごうてありますまの。一ホニ。をまのさご面
白うごといせう。何卒あう。交りのでごいませ。一古指
か。あひあう。借。友お出。ヨ。お。難子由。お。拵。ひで。貴時。ま。名
え。と。い。を。ま。る。人。を。う。り。を。存。ん。こ。サ。ト。や。て。お。絹。ハ。て。の。世。
金。の。便。り。小。妹。の。お。氏。鼓。の。と。お。流。や。う。と。り。ん。所。へ。お。出。
と。と。お。意。お。狂。あ。う。ご。の。人。由。必。来。べ。一。時。宜。お。よ。う。
又。一。が。を。あ。う。て。癖。妹。を。つ。る。と。あ。ん。と。ん。の。裡。ら。



飛立とびたてををりり小こおおりりどども。今日けふはは衣きもの乾ぬいたた料りょうありて。
ととぬぬくく囉らひひ一ひと青あおのの代しろ也なり。画え勝か小こあありりるる送送り懐なつこささ小こ。
又また明あ後ご日ひ由よし借か衣きもの裳もとととと是こゝ是こゝ之こゝ狗いぬ小こ痞づつつるるををりり。
いいせせんんとと換か換か也なり。口くち隠ひるる疥せをを察さつししるるおお夏なつ衣きもの簪かんざし等ら。
よよりり何なにををりり。把と出だししてて紙し不ふ接せ也なり。「こゝととはは漆しやく小こああ。
いいけけととどど。全ぜん体たい今けふ日ひははいいままくくとと。おお味あじととててままううしして
此こゝ就すなはちち也なり。ままあありりととのの入い新しんおお酒さけハハ飲のみみささううをを。仕し指さし
ががあありりととのの代しろととヨヨ。何なに卒そつ帰かへりり不ふ獲とれれ不ふ也なり。業わざとと

仕してておおららとと下したののみみ々々おお絹ぬいががああ不ふああけけばば「こゝイイ是こゝハハモモウ
ままううあありり。ははるる由よし頂うききままんんしし。まま今けふ日ひ由よし頂うりりとと。
「こゝナナおおおお世よををりり。ママアアくく取とりりてて並ならべべてておおららとと。そのその代しろりり也なり。
後ご日ひハハ何なに卒そつ操そう合あししをを考かんへへおおららととすす。たた招まねりりとと自みづからら
慢まんりりいいがが。おおああのの仕し立たとと衣きもの裳もをを忘わすれれてて。踊おどるるのの由よし。
見みせせししとといいららササトトいいををままををてて見みせせばば延のびびあありりんん「こゝ見み非ひ
明あ後ご日ひハハあありりまませせりり。俵たわら今けふ日ひハハあありり後ごあありりてて。種たねとと
あありりががととりりいいままんんトト一ひと禮らい述じゆつてて帰かへりりんん。幸さいわいハハ不ふ也なり。

妻く影し。世の流小由持る神。あまの助ける神あり
と。是等のことをいふあはれん。幸ハ二十あるふ見ゆ
ど。何れも何を性として。如在肉候のさとし。不
思しと。めでたき事。長負ふさき。母らの幸苦を。
忘る種と歎べ。幸ハ由傷く。より。史といふ。日暮る。
負実律を神や佛の。あり。是の人のあはれ。と。史
帰いのを。歎かめり。かくてその翌日。赤村屋のさ
ひの目。殊小天。丸中。うら。あて。いと。静ある。日和あり。ま

お僥倖と嘆きあがら。と。か。か。対る流。一。え。仕。候。て。取。て
髪化粧。每人が。二。食の。食。の。菜。火。鉢。の。傍。へ。ひ。き。よ。て。
出。籠。へ。さ。き。を。べ。き。あ。さ。の。中。の。か。ら。ぬ。中。う。准。儀。あり。
史。あ。ら。う。性。を。あ。り。ま。す。ヨ。全。体。を。う。ら。の。獲。り。ど。け。は。
ど。早。く。性。を。用。が。あ。る。あ。ら。う。手。傳。て。あ。げ。る。が。宜。し。と。性。作
ら。う。左。指。を。ぬ。せ。ら。う。ま。う。を。所。の。人。が。ア。内。美。さん。ハ。此
以。ら。う。出。て。歩。行。と。大。か。く。性。を。あ。ら。せ。ら。う。ね。何。れ
遠。此。指。を。忌。物。を。忌。む。と。如。う。い。ふ。事。不。お。り。ひ。ま。す。す。

と胆を潰さるゝ哉許由ありまらん。その人達を尋ねては
流あさひの。何程であのまきう。更ううんやア吾儕どのハ始
めううして一文あり。活新ぐと両う。二両のものを持居ておるを
とまて今日まで一日不二回結つておる。まきうを申小糸
物丸拾をきて居る。継由強ておとさく。の。忌
物を引ひて居ます。の不測どとおりのわどあがらぬ。又
出来る時音が来まら。綾紗でも着ませう。ハ子。何のそ
指ふて。此些でも。昔ふまると。いふ。ごう。いません。ヤヤ。く。暗て

居るうち小夏實及が来る。ドレを申性ませう

第二回

あふ二國橋の川向ひ赤邑屋の樓といふ。廣らうある
小より。吉曲踊りの大きき。い。大。こ。ら。少。て。催。す。ま。り。今
日ハ中村秋吉が。弟子おら。び。その。連。申。お。り。て。の。後
ひとと。朝。ま。ら。れ。う。集。會。人。い。ら。の。樓。小。免。満。し。る。世
活人等ハ舞臺を補理成ハ雜子方太史の。山。を。意。を
外と客の杖交ハ青竹をりて。手。指。と。あ。り。毛。襪。ま。ら。ん

檀邊を後て。その花やさきりくろりあ。赤治史婦も
女児を連れて。今日を晴と誓ひ勝利。衣裳甚も新し
赤治史の。小長指を昇る。入ると赤治史世話人初め。
脚色の中へ強出。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
赤治史痛し。かくて赤治史の。赤治史の。赤治史の。
取らせ。かの青竹あて仕切。と座の方へ入。赤治史の。
今日存り。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
て。且赤治史の。赤治史の。赤治史の。赤治史の。

と色苦小由の家。祝儀をさ。赤治史の。赤治史の。
藤の花をさ。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
かる富貴を。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
准儀を出。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
雑子。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
赤治史の。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
さて赤治史。赤治史の。赤治史の。赤治史の。
か引か。赤治史の。赤治史の。赤治史の。赤治史の。

あきのまんのう。突ふ者、襦あきのお骨あきまろぐあきんえまんあきヨあき
「マア煙草あきの火あき消あきてサあき。と火あきを持あきてきてあげた。然あきて下あきの伴あき取あきお居あき指あきえて先あき刻あき取あきけと重あき浩あきの。おすわと
載あきせと来て。たのてきてきて大あきト婢あき女あき小あきのひつりききり。程あき
程あきくと影あきまろち。重あき義あきを持あきてきてく「重あき延あきおある菓あき
子あき色あきを出あきす。アサま方あきのとト把あきすく鮎あきをさくこと」
と先あき刻あき取あきる重あきのえとが「ッ結あきて四あき後あき何あきどろ解あき
まりあき定あきさきうせりあいのねエ「ハイあううう。あう。あ初あき結あき

をいひまきまうて「ナニサあちう小あき由あき種あきくあるう。と
女あきども小あき孫あきまする。ト何あき時あき小あき智あきりぬ也あき在あきま。影あき一あき序あき
不あき鼓あき亦あきを以あきて又あきあんと先あき刻あきうり。度あきく胸あきよの浮あきれ
うど何あき招あきり入あき親あきと根あき石あきをさく事あき困あきむともあうんうと。あ
い曹あきて細あき小あき出あきさる程あきあ次あきの幕あき毎あききとて。お夏あき由あき彼あき
方あきへゆきけと。今あき田あきの鼓あきの名あきお少あきいごいの人あきまう。お家あき
けと。若あき似あきと人あき由あき出あきうると。アハと各あき島あき田あき築あき十あき四あき
五あきろりの痕あきの。依あき由あき何あき招あきりぬのあうんと。お八あき纏あき

ほろりおろろ。十五六の角筋整がらの圍ひの内小入も。莞
示くこと笑ひあがる。一面あろうとどいませうとどいませうとてお
絹の玄袷あ。一様小色いませう子とりお折る処小
居る婢女「あんどナ長吉どん何小来と。大さる形
をそ処小居ち也ア。吾儕小一向うえあい。おあが
ちアレあまこ小。お核教があるぢ也アあいう一とら也アサ
居所由あるけきと。まというちあのくら来とんぶと。兄
終くア。小報ハ。先次宅へも来と。佐新町のお校見小。

借跡店のお初ッ見小。モウ一人ハとさ池の端の一寸身
子のかあとりん。ど。何格とて池の端のま時江
を一枚の御色どろろ。陰排が遠うあア「モウその口釈ハ
道うろ。サアく彼地へ往ふせエ。「アよく人を形磨小
やまふア。是よりろかあのお尻を些をろり切替ると。こ
へ出へえろろまるりのラ。一アよく人をする麻小あ
ア。お肉美さぬ小玄告るヨ「イヤアとや也ア。あ
あへ寝ろろ。アあうとまろく往ませうトま小かまらば

「はまの面白丁稚さんご子おさんごん此処へお出
吾儕ハ形が小さいう。何処へ運入てお居るまう。
お角の子由来そののラ。その一幕幕お出下りひや
少一招へまじり婢女ハ元来産る出のまゝおあは入かする
「十二とで吾儕ハおどヨ時おア長吉さんごや。おあは
と鼓うちや。何うを妻しくおしてお在る子。大くは徳方お
使もておおあけりまう。今お招かさ。ま時お仕立て一おと
りのお。何といふお師道さんご上。おとまう上。どうやア彼ら
の

おの幕お出。お氏さんといふ人サ「おや、女で産まう
う上。大くこのお良人のおのうらう。おやサその良人と
いふお。幸お傳音といひまう。一おとまうといひまう。どう
やア三年をうり跡お死で子。まうアお氏さんご。お子と取
て教へて居るまう。「おやお招う上。おのうら。おとまうやア
全体お出。女児を由あるまう。十二お招かすア
ありまへん。彼人の宅ハ釣掛の糺兵後でまう。お
先頃お招く使お住らう。おあは。おの毒まう。お招らう。



お
精
を
た
ぐ
ん
あ
ん
逢
ん
果
さ
ん

些まろりどげきど 釣掛の音 俗の宅へとの手筒を竹卒
抛て込むお兵衛あらして 天保を一枚つひて出さうら。布
けておのころみぐあて 史をよく知つてますト 不問清りの
下推が祠。ときどけ彼がお民衆。とあへば胸の得つと。お
つと徳とて。ツヤツ。左格うエ。き格小庭云が出来さうら。バ
さぞ格。さうらねエ。おあつとさうら 吾儕が頂いて。まごま
をつひあいのどころとるヨトさうら 出た翳をさうら。ドレ
仕ませうと致してゆく。お侍のあへく 波礼。とさうら

寸が遠みあ。樂屋へおきて 密小味び出。久らがりあて
対面し。ツヤ身のさうらの 律つひを。具小影。と今うらうら。
女あらうの力草。まご友祝が 今日忌日。史て茶湯や
冥指由。供へるものと 飯舎 思按ありや 狂云の。まご
を供てをを五出。楽屋の口まを 仕さうら。まご何と
あへ 護り月新さふ。二足三足とさうら 度と。ツヤ身のさうらの
律つひを 在のまあへく。さうら。史をまご云とあへ
お取時。何を云てゆさうら 云 叙。身の切あさふ 面あ

拭ひ。あつとねてをひひ立てをふせゆさるん底と。あし
らとて観詰。色ね不倍るしありてん。往あまのころ
物妹の親とてゆき果る。今日不限りしと不ゆ
あつと。あひかてしとあつと。えの席不ち帰るふ
裡の千美先量傳へてあつとあり

毬唄三人娘第二編卷之上 終

毬唄二人娘第二編卷之中

東都

松亭金水編次

第三回

お張の遊懐けきと。妹あつとゆき今さうふ。お民か
量りさふ。こつとびとてお摺くふ。おひひかてしとあつと
ふ。名もあつとを帰る。お民のち不折のお得が。
在るさうの神あつとね。あつとあつとあつとあつとあつと
て涌るゆき秋樂。あつとあつとあつとあつとあつとあつと

家へそり帰りけき。形て後赤治の渾家い。お綱を
二あき若とおりひ。何ふて中泥町の程さく由近きん。
そのうく咬べいと汚く。授き家居といふあまらば。さぞ
物るふ不自由と。きりなき鳥坂代地ふ。よき明
店のあると。咬。遣地あどを調へせり。さふと徒り
住せける。見さくまのそ廣くあまらば。泥町よるとい
突んあて。家の造り中新りけき。お綱史押の太
不飲び。さき日偏ふ赤治のお蔭と。主人のどくく不飲

まひて。月く不衣扱の仕立をあせむ。赤治史押のお
綱が奉初。ふどくの老実あつを。ゆりく不便ふありひ
つ。日暮親しき。申し不申。仕立物の吹聴まきまら。一とび
おこらる人い。その手際のをきさを替め。次第く不潔
意申越て。今のあまら。物々の善し申さふあつひ。
幸八が長の病。氣申。さ落紙を片づく。その二月三
月がなごふ。八か通り快あつあまら。お綱いゆりく。恨び
て。お綱あまら。お綱いけり。是より話分兩頭さふ不潔

産る希^{のち}の父^を産^まふ湯^が迹^を嗣^ぎ。年^若あはれと実^ら
体^あて。得^まるま^らりの情^出け^まば^んて^まを^見る^負
不^あて。産^まふ湯^が在^して^記より。南^の倍^るふ^つけ。そ^の年^若
勤^不ゆ^あり^ぬる^ふ。仙^合一^極を^要る^こと。家^業昌^の
基^あり^まと^か及^中未^まり^てあ^る初^め。親^しき^人ゆ^りみ
け^まど^まが^遅う^らと^のこ^回答^す。その^まふ^こと^あり
つ。家^業成^励之^効め^ける^が。上^及相^生の^機え^ある^も。異^ご
ふ^や後^ある^もの^親の^代より。万^事取^引を^ある^ふより。

相^あら^う。仕^入を^おく^こ。年^のう^ちふ^六七^度ゆ^り。ゆ^り
交^て流^文あ^る。後^ある^もの^産る^希が^年ふ^似あ^りぬ
体^依あ^るを^ふ不^あて^ある^が。う^らが^思の^如く^いて^色
之^仕入^くて^未る^度毎^ふハ^己が^家ふ^遅あ^るを^ゆ
隔^あく^まる^ふう^ら。産^まふ湯^が年^の親^のど^くお^りひ^て見^る
を^教ひ^ぬる^こ。之^のま^負実^ふ交^りけ^るが^この^家ふ^個
の^女児^あり^て。思^まが^深と^まび^候し^て。鄙^くい^てど
繁^華の^地ふ^人と^ある^まが^立奉^初より。万^事莊^云の

風をまぎびく。髪化粧より衣服まで。世風を競ひ
けり。殊小標致への色あてり。稀ありし愛咬以年
さく此年十八あり。いと婀娜ある處女あまは。を
見ふける。若りの心。心を幼きるいありねど。この機屋
ら桐生あり。一二を争ふ大衆あまは。女兒の深窓小
若ひあま。仮初の出遠入ふ。小奴婢女を三四個。傳
そひてあけり。唯とてまぎん若中あり。道よりして物
をいふ。暇さくあるべし。とふ去年春の沈流を来りし

海人小瀬川小深次といふあり。一。尾村うち枯と
うとあく。あく来りて日産を秘ぎ。或ひ桑取の
傳ひあどして。その容様あふ。つえけまは。後ち桑の
不便小かり。後人どふあま。若あま。何れどの。しう
仕出ま。ま。あま。殊のへあま。思ふよりして。あま
早。以あひ。武士せ。侍を。今春。あま。日産の
小深次。若中。小奴小ある。一。年。小ま。二。年。小
ま。と。小若く。衣。若。と。小。整。ひ。と。と。あ。郷。の。瑞。小

とらんといふものあづー。いさづー一生の才の落つま。よく
思按しあんして後投あつらせよ。とう得えの歌うたといふちふゆ。そのま
いまる長由ながゆ法ほりく。後難ごなんをさくさあめい。さよさぬが土地とちの
人ひと氣きのつ憑よくといひけまづ。小源次こげんじの後ごを流ながし。便べん
寸すんあき身みをまぢどふのふて下くださる。正伝せいでん切き然ぜんんでも忘わす
はまらさん也。と実まことあつりつ。おむおぞ。然さいといてさふ
石抱いしづかへ。小奴こなんとあつてあきけるが。いと母はは妹いもうと小佐こさつる
りどふ。後あち志しのいよき人を得えらう。とふ小奴こなんびて。

何なんらきのところち任まかし。譜代ふだい庭子ていこ小具こぐあつて隔へかく
あふふより。小源次こげんじのその指さしめ。あつりつとゆらち高たかれ。
女むすめ兒こ源深げんしんをいふゆい。さふのまを更さらとおをさる。
心を疎そくめあづら。人月ひとづきの算せまのあげまのころ。あつて
その何なんへをづくべき。便べんりさくゆあきまふ。さ。流ながふ
拍はくを息いきしく。おゆあつておわりひけを。おつてその年とし
更さらゆらさ。夏あつさく園ゆて秋あき近ちかき。あま月の末すえとあまの
朝あさより照てつるを月ひ影かげあ。庭ていのまき刻きるをうり。燈あかり籠かごの



しゆ大うの仕舞。やも遠中あるふり。嘯時いあを汲
こ。母屋の庭う子舎その小庭をまきとて掃除あり。
照る日小弱草と樹へらち水あたまるるど小涼風
忽地かとづきて。暑き衣を心地せり。その時密く小
室の下小人の低語声まるあむ。小深次の小首を傾け
「ハテさうい異うハエ。うい深深さんのお子舎。ぬのこに人
の来るの所。さき小何で中一人の雄子女いこく小深深
さん。何を密く月証まき。ハテ誰ごらうア、あつこ。先

別荘去の須差が久しからとて暮さといふ。噂を聴くか
らど先。深深さんと吳あ素振。その思の晴で白眼
をあらと。的音利とさ小差ハ移へハ。乃理とて此
以申う。何ぞとりんと深深さんが。須差さんい何松
あさらう。四月のましまで今ふつとえぬ。勿福病氣
の噂も噂う。まづ快くおありをあらう。ト狗小豚
つて口へ出。まこの中いびく。咳。ハテ恙くし奴等ごと。
狗いさまがう有也。無也の。算あうあく小塞ぎつ。

てを拱こみねきて部まじり小こよりそひ耳みみを潰つぶしてまゝ人の
ありとのまゝに裡うちあてい色あざを思おもふまのび髪かみ「ま
でもまづ快くわいありで。何なん指さし小こりまゝうとまゝいませう先
頃ま由ゆ武ぶまふぞんが。おああの代しろり小こ仕し入いま小こ事ことと死し。
何なん指さし也や目め指さしいむらうい。殊こと小こよりと陰いん忘わすの。傷きずを
小こあつう由ゆままはあひ。何なん卒そつ左さ指さしまゝくまひと。お醫い
者しやままがうさうまうと。變まこくまひ何なん指さし也やありまゝと
らう。まゝ後のち由ゆ業あどもまゝらうで。幸えん指さし小こまゝくまひけし

と。んこまみ糸いとをわげりりゆゆまゝだ。每ま物もの毎まい名なさななに
出で於かをうけて陰いん影かげ也や。何なんで幸えん指さし小こままとをまゝと。処ところはめ
らまてい云い釈しやく小こ困こまつらゆゆありまゝとツつけ「イヤモウ一
頭かぶも切きあくツて。アモウけ指さしあうりゆそのゆ。死しごまら
か宜よろらうと。あつらふゆゆあつらふゆゆの対たい小こままを
快くわいあり。今いまぞ例れいとおんあゆゆ。らまゆおああの信しん實じつで。襟えり
名なさぬのお蔭かげごらう。まゝと痛いたあがりゆまらひ何なん指さしごらう
うと愈いゆ云いとが。モウ今いま小こ大だい物ぶつあ。帳ちやう合あゆせあまゝん。

招ハア 呆まき。殊小 氣麻味人ごねエ。今さらう 貴
望の花とくして。止て仕舞位ある。初めツラう 氣を揉ま
まません。今さらう 妙りゆゆ 悪病ういづ。おあ招し何
あてう。物小 暇小 左時で也。忘るるとりいふあく。何
卒して 花去へ 佳き。主婦といを色て 見えふりのと。必
ひ立てい夫の 揃ゆ。とまうあいやうごけきど。おあ招の
ふゆつらうを。まごあ親へを招あみて。昔方を 撰ま
ゆ不孝と。かりひ垂して 時昔を 俟て也。何時といふ

貴也あ。殊小 氣が 揉まとの 申小。おあ招が 大病と。
吹ふのゆくカが 落。モレ 万一何招うおあう。昔 儂ゆ
物々 洲川へ 沈んで ありと 追慕て。彼世で 連死と
是 枯しを。葬ましと 所が どんくと。快く ありごとと
吹く 振しき。今日 久しからんを お目小 かつて。ホニニ
らまし いとく 何のし。昔 儂の 命まを 捨つと ありに
おのひまは。そま小 今の ありふ お云いさう。心しくつて
ありません 下 神教小 あり。世を 善む 善む 後。

是より忙然として。吾より一が聲を低め「コサを
招小後末さんナ。万一人が嘘と悪い。今云ふのはマア左
招あると浪風があつて宜と。世も窮し由因招で実
いかおの氣を引て「んこと。新がひやくた招ひん氣
あつ。自己の是くう手張を極て。牙を抛出して由律
をさやうサ。新詮今のひある。表向で相控しあやア。
老父邪さんが承知しぬぐ。左招うと云て止まらざん律
およると中へ立て異と人小。飛と迷惑をかける由眼

お。とまよりう何招あるて由。自己と選擇不ある氣
あつ。四五親あやア済むけきこと。一旦強出て落出
へまて飛て。とまよりう人をひいて窮しをさやうあア。左
招あつねく「んねく勿論左招し「う出入を前後
し。親子の縁を切て仕まふ「うそのあア世間へ對
して由。老爺さんが後を立て。云ふあア遠く移しけきこと。
更由まアみ年う二年。一生縁がまきまじ由せん。を自己
が左招まると。懐合が世むらうしん。又うと安く由百

あまのりの。勅定があらうらう。史をば何れの日を極
つて返せしよふ。ア業然。とまぬ。困るしよりの。多岐
う。新町。本庄。深谷の。降。先を。集めり。ア
何れし。中。百支。阿。元。ま。ら。う。左。招。し。て。つ。る。と
そ。ま。ま。ア。何。招。う。箇。招。う。に。が。つ。い。く。か。あ。その。元
あ。ま。う。あ。う。あ。ア。詮。方。い。わ。せ。一。ま。ま。を。首。尾。と
性。と。あ。う。陸。か。左。招。ゆ。あ。ま。せ。う。が。何。れ。の。二。十。八。里
と。六。里。と。あ。う。花。土。の。し。道。い。ま。う。一。個。は。ア。一。そ

ア。ア。ま。う。ま。ま。う。う。う。う。何。れ。一。個。で。性。ま。る。の。の。う。は
肉。征。の。一。件。う。う。減。多。あ。人。の。教。ま。ま。の。せ。ん。ナ。二。箇。招
ま。ま。う。会。般。帰。つ。ま。の。次。い。その。積。り。を。出。せ。し。て。近
新。小。何。処。う。陽。ま。て。最。て。然。し。て。お。あ。小。内。通。ま。ら。う。
ま。下。お。あ。う。何。処。ま。を。来。り。ア。史。う。ま。の。と。出。う。け
ま。う。一。ホ。ニ。左。招。し。て。か。う。ま。と。と。乃。由。お。あ。招。と。二。人
連。何。招。小。法。い。う。ま。ま。ま。せん。何。率。左。招。し。て。お
呉。あ。ま。い。ナ。史。小。子。ま。さん。便。く。と。返。さ。ま。あ。い。る。が

あつ。四月よりして経水を引く。まう何ぞも拍が
悪らう。塞いごうして困つた。その次第に漸く治るは
と。徳と影一不喫てわら。悪阻とやう不遠ひあいに
とまふつて中腹が苦勞ト喫て強くなると云
徳深が扱のあつてを兄信「左招うてや」扱し
やうで。大變あ一件ど。まう「まう」扱し
「何招して今も知まふのう。まう」モウ一月。二月
らやア月不遠ませう。まう「まう」子産さん些中子くして

お呉あまのヨ「今般帰つて出産次日あア。丁度
分へかゝる。まうを治兼て十八日。十九日まであア
倍度来る。おあゆその積りで親四不中。曉らるは
やう不遠信を「不遠あ」まう「何卒をまう。ま
遠へちやア産ません」ト大々「影」の終る頃あア
母の聲高く。徳深くと呼ぶらる。徐とぬき足次
席下。産を席中容るのう。別としてわけは表あつ。
小孫次「何をを賜く」イヤ「モウ」飛と影「まア」



添ていと履く。翌日小ありけし。例のごく初胸のま
ひ。産者帯の後あつが居る小あり。今日由まこと容
子から。異さつでございし。た招サ。何ぞ相々。実
あう。かあをなまし。拾別小降ろあう。つり。実小
伴ごら。一。エ。モウ何と申ございし。せんが。二月をう。賈ひ
まは。ま。ま。おに任とあう。疎小勅定がかりま
後。それア。かあ主會て。よく視べ。尊小知さ。史も
かあ。の。採て。ら。る。中。か。あ。交。う。大。き。ま。口。元。文。が。出。て。宜

つ。ありやア。大抵納まのころ。一。エ。何由。ま。あ。う。い。ま。せん
が。ト。い。ま。う。こ。こ。後。あ。の。が。女。考。お。麻。の。出。来。り。一。何。招。ご。エ。ま
さん。持。い。一。モ。ウ。一。向。右。ご。い。ま。ん。モ。レ。時。小。あ。あ。の。後。文。一
かり。ま。せん。子。一。あ。り。く。小。さ。あ。り。ぢ。や。ア。あ。の。を。知。ろ。わ
と。何。招。く。あ。ん。ど。後。の。戸。振。を。ひ。ま。あ。け。て。帳。面。を
と。り。出。し。一。ア。お。と。あり。や。ア。定。う。五。月。の。音。白。ご。一。ト。ひ
つ。そ。題。を。採。ひ。ろ。げ。一。う。その。時。お。あ。の。手。間。の。丁。友。ご。小
掬。ん。だ。あ。る。一。つ。れ。ん。ふ。勿。論。病。中。ご。ら。代。筆。と。し。て。あ。る。ご。

中形申突てあり。殊不使ひのまきまき。見遠ひのあひ苦
どろ。何指しておあ知らぬ。一左指サ勿論その以て。若
中同指てありま。快ありやア初くと。是非のを移しけり
やアありません。志まる。伏申ありま。めエトのひひ自己が
簡を披きつるま。屋敷の泣又ある。この品とをと一書
い。あろく。容易き品あろく。を。奥の判申さる。てあり。い
小申不測と帳面を。つるま。おりの速返す。想めて二百
あ。と。い。と。ろ。ろ。を。希。と。果。と。小。果。と。を。と。右。左。の

細申あろく。お麻申突て不意。う。何指申見せけ
の。を。武。ま。希。と。ん。が。一。人。を。披。く。紙。い。あ。の。サ。を。ま。き。ま。き
えの。代。ろ。ろ。久。く。勤。め。ろ。ろ。人。ご。け。き。と。を。処。グ。お。あ。下。せ
結。小。の。ん。夫。申。伏。申。測。ら。ろ。ろ。が。号。ろ。ろ。難。い。人。ふ。と。お。ろ。の
人。申。ま。て。あ。い。と。お。あ。の。他。小。家。内。の。あ。い。と。モ。死。と。ら。ら。斑。小
ま。と。と。あ。い。と。を。出。し。と。申。ま。き。ま。き。あ。い。あ。い。何。ろ。ろ。難。申
あ。ろ。あ。い。と。他。の。ゆ。を。懸。く。ろ。ろ。を。ま。き。ま。き。あ。い。が。ま。ア。何。ろ。ろ
早く。帰。つ。て。ろ。ろ。細。申。て。お。ん。あ。い。と。い。と。を。ま。き。ま。き。と。思。按。小

くまを多^い俯^くて云^ふ業^の由^りあり。お麻^あのい^いと^との毒^{どく}ぐ^ぐと
「まんざう武^ぶを来^きぶんが押^お成^しと。い^い斗^とり^りを^をあるま^まの
「ま^まま^まの^の一^い右^う指^さの^のい^いけ^けあり。ま^まお^おの^の仕^し指^さあり
ま^ませう「^い工^く有^ある^るご^ごう^うご^ごい^いま^まん^んが^が。殊^ま小^こ合^あ点^{てん}が^が性^{じやう}ま^まん。
金^{きん}体^{たい}の^の日^に五^ご日^に由^り。用^{よう}を^を足^そく^く休^{きゆう}息^{そく}と^との^の必^{ひつ}ひ^ひし^しと^とが^が初^{しう}
い^い時^じに^に登^{のぼ}る^るを^をや^やく^くま^まま^ませ^せう^うト^ト必^{ひつ}ひ^ひが^がけ^けあ^あき^き災^{さい}難^{なん}の^の早^{そう}
小^こ息^{そく}吹^ふく^く脚^{あし}の^のど^どか^かあ^あり^りく^くま^まあ^あづ^づ

謎唄三人娘第二編卷之中 終

謎唄三人娘第二編卷之下

東都 松亭金水編次

第五回

そ^そと^とは^は半^{はん}八^{はち}の^の並^{なら}び^びあ^あら^らは^は美^みひ^ひ一^{いつ}人^{にん}性^{じやう}比^ひと^とう^う丸^{まる}ん^んが^がう^うと^とい^い
い^いふ^ふあ^あら^らう^う美^みを^を希^{まれ}い^い必^{ひつ}ひ^ひう^うけ^けむ^む也^や。濃^{のう}濃^{のう}が^が懐^{なつ}妊^{しん}の^のう^う
を^を受^うけ^け今^{いま}の^の進^{しん}退^{たい}谷^やま^まう^うと^と。年^{とし}未^みより^{より}種^{たね}く^くの^の大^{だい}恩^{おん}う^うけ
る^る後^{あと}あ^あら^らう^うの^の小^こり^りと^との^の苦^く芳^{ほう}か^かる^ると^と也^や。是^{こゝろ}非^ひ小^こあ^あよ^よを
ぬ^ぬ時^{とき}宜^{よろ}あり^りと^と。悲^{こゝろ}路^ぢ小^こ迷^{まよ}ふ^ふ美^みの^の因^{いん}志^しいと^と密^{ひそ}ぢ^ぢり^りひ

あひ 合せて申。心程の空ぶらしき。仕方ありと我あざら。惶
お由 ころんそのおろろ。多代武末が計らひとて。いと大枝の
しうみの 貨物を引取らうと。吹らう小。まゝ一層の苦勞を倍し。い
らせんとおろくど申。新詮とて申て。綱の遠く。ひとまら。甚
ど 出へたら。帰らう。その貨物の性先を穿鑿。遂てそのらうで。
まゝ。都合由まぶけきと。此次小来しと。此の。深淵を伴ひ。争
るべき。約束の昨日。あたら。若そのどく。小まる。時あつて。と
ら 等の計較あま。大金の貨物を。まづ。引あき。らうと。

うご 疑がひま。んい。必定申て。全く。知らぬ。武末が。所為由。只管
つが。身小。掛り。申て。一件の。帳合と申小。二百兩。出さ。ぬ。ば。
えんぢやう 勘定。い。ま。が。う。新詮。その。金の。延べ。引。一日。あ。る。べ。う。ん。
と。か。り。の。言。交。互。極。し。て。ま。ろ。小。お。後。の。思。按。申。つ。ま。を。ふ。
や 合。小。来。り。て。些。を。ら。う。の。為。の。物。小。村。を。う。ち。う。け。や。照。目。の
あひ 庭。を。あ。が。め。て。居。り。か。る。新。へ。按。是。し。て。来。ら。る。深。淵。を。差。
ころらう ち。希。が。侍。へ。ひ。の。う。り。傍。副。て。一。昔。併。の。差。で。吹。て。居。ら。る。
えんご。り。て。あ。ま。し。け。子。彼。武。末。と。い。ふ。人。の。昔。併。

まごの稚き時。老ふ衆さんのお供まで。来ると
し由を曾おお招の代り来ると
由救回あり。あつくお招るゆをさる。悪い人といふおんごが
早竟病気でかまごう。不承し悪くありませうが。
今う車小お帰りせぬ。悪くしうる小合まはまの何故と
いふお招が。今回此方へお出さうや。尻がつかうるとおん
う。教を隠し小遠ひあのお招して見まは強いのううで。
お金の出所い何処小由あ。お招が背負影で。疎小大

え
愛せありまをね。まお吾併がお招と。一祈ふと
出てお招あまの老爺さん。後立物見小。何で由お
へて勤定しうと。いふとらうと。おひまは「と」で自
己中驚惑まるのサ。お招うと云てそのこの。斤の付まを
おあをく小。あて日あやア一件が。是非をさば小。お
いあひ。お招して見ると。大變のさあ。おん
くまると。親類へお招ける。然りあきやア一間へ入ま。お
がつくと。おてつると。お波影しをさるゆあ。疎小

つまらぬ程と小あつア。まう一左指く。跡先を結合さく
考へちたア。さうせ其うア往後く。何せ也昨日のお説あり。
やううしてささう後小何由か由斤を付中う。何卒左指
まて下さのたは作あり万と。既許一七日許けらまこと。
殊小指末小いけあいう。一実小義理い無いけまこと毒を
旅らば四ませど。モウ。形あのちたア。詮方ぐおく。一そんな
是さん世尊をや。一全体をこの携りどつ。容子小
よりたア。そのあふ由。一アイ。あると少早い。ご。その携り

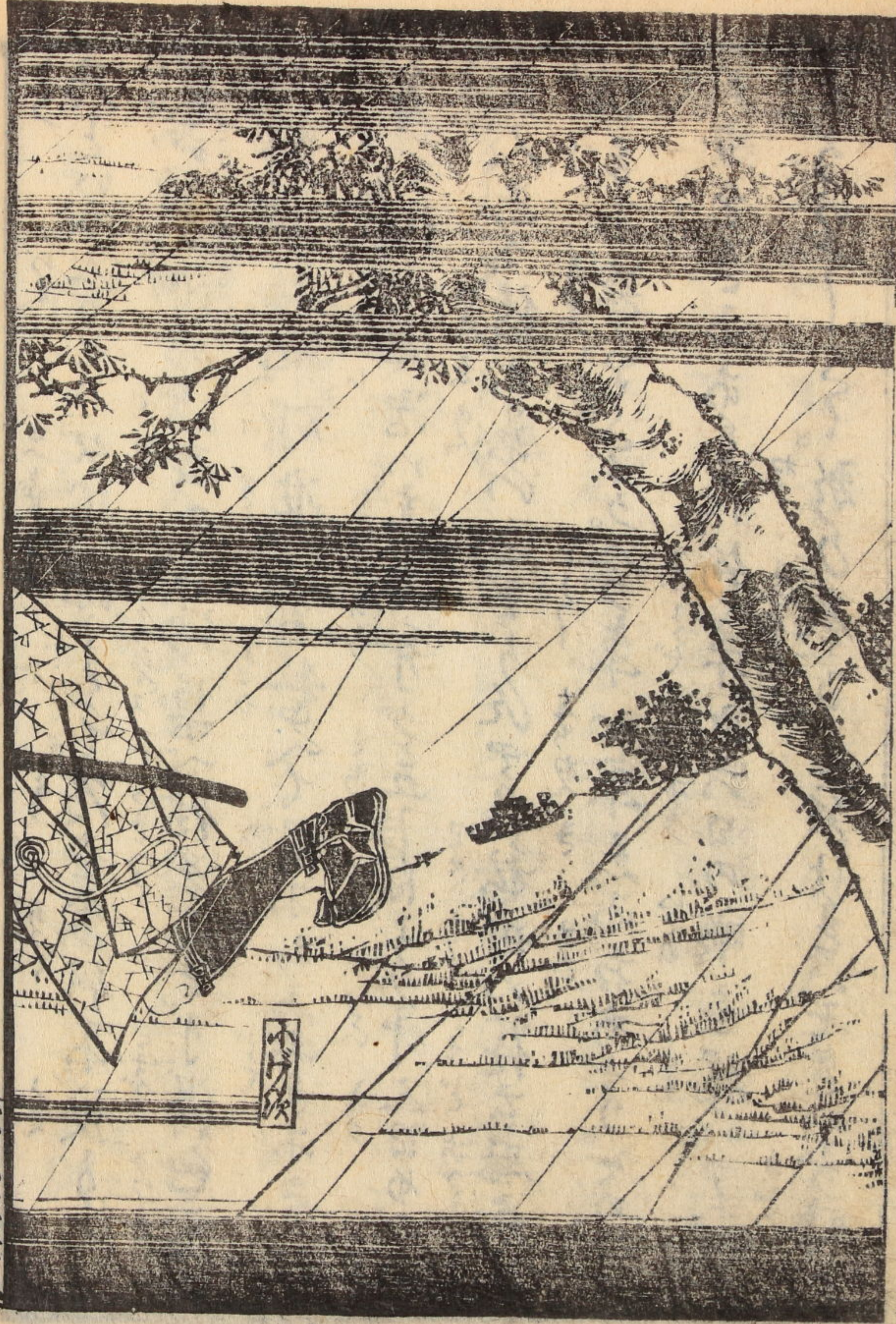
や准後をまろく。一々。史あつ。その携り。下約束。一々
とち別と。既小その明の朝。是を帯い。脈を告。ま。取く
ふとち出とまこと。本街。及つ。え由。あ。ま。つ。さ。つ。へ。ま。ん
とて。七八里ある原。乃を。端く。社け。ご。照る。目。も。渾。身
を。焼。ご。く。堪。ご。け。ま。ご。体。を。務。め。て。及。お。あ。ひ。の。外。も。も
ご。ら。む。ご。の。日。の。夕。暮。や。う。く。と。高。崎。小。若。け。ま。ご。の。秋
も。を。廻。小。宿。を。かり。ま。て。翌。日。よ。の。祈。の。海。意。也。形。ら。ち
ま。い。て。拵。ひ。の。金。子。を。と。り。集。め。ま。ご。より。形。町。へ。と。あ。ひ

うど。彼処へ三里のるあまは。又昔より不便して。まこと
言はれし。秋由泊り。翌日の新町へ行き。得言を巡
りて。その集め。本庄宿へ健小二里。こをまきひて。泳谷
へ来る。その日。日金く書けし。こ小宿りて。その翌日。こ
の得言をうち巡り。供養谷へと志次。よめ。九と三
里あまは。申刻あまは。こありおける。かくして。海の葉
へ。四里八町とて。その実。五里小由をまき。悦あり。その日
のうちに。性んと。あまは。悦へ。まあ。ねど。常小別とる

た。と。ひ。今。あり。又。風。涼。く。て。乃。を。少。形。不。夜。り。よ。
急。ぐ。成。刻。の。比。及。少。の。時。葉。へ。性。と。と。得。言。に
ふ。由。急。ま。挑。灯。准。儀。不。整。へ。て。名。お。あ。ま。土。お。不。さ。か。る。
愛。お。彼。小。源。次。の。表。を。穿。ぎ。五。一。日。より。才。三。日。め。の。物
主人ある。後。た。あ。の。お。ま。う。ん。中。り。私。母。の。花。去。麻。布。花
後。吉。お。葬。り。と。さ。う。今。年。七。年。忌。お。あ。う。り。その。忌
日。由。を。ま。お。あ。ま。は。何。卒。五。六。日。の。暇。を。編。り。て。墓
より。う。と。う。た。ひ。奉。る。と。い。ひ。け。ま。は。と。ま。あ。う。時。の



新谷の
小川
長谷
あふ



小川

志し。勝手次第不出立まきし。女しあまごの法より
助と文擇よりよと銀の色とを取ておし頃さ。さして侍
輩不申をさし。小娘もしと立寄り。彼の此のとも
君より。未刻に不申あり。いふも女もよろい何事
の道をゆくへき秘日あり。異さ。批大。寛くこと。徳不
しと望願けし。ゆくゆくとし歩けり。おと不太田の南不
奉し。はらま女。美昏て宿引の女。いそと不集會々。
モシ。お泊りあき。き。客方へお泊りまき。つて。下さ。りや。

とげん。ぶら。や。けん。か。り。ね。ま。と。か。
出籠の上向か。袂具の絹布で。若お寐るのお伽が
りるあり。吾儕が。出て。中。の。他。小。おん。宿。女。の。ご。り
おん。ハ。ト。紋。を。と。く。て。引。と。む。る。一。と。り。也。ア。客。一。と。り。強。宜
ご。お。ア。と。も。ご。で。二。百。五。十。あ。り。毎。晩。来。て。泊。る。べ。エ。女。ア。
お。客。さん。串。銭。を。ッ。う。と。おん。宿。女。の。別。で。ご。り。や。さ。ア。
フム。お。格。う。幾。千。ご。と。女。おん。宿。女。あ。り。強。五。百。ご。の。か。り
他。と。遠。り。て。中。の。由。何。お。申。ご。り。や。せん。モシ。吾。儕。を。呼
て。呉。さ。の。あ。や。つ。也。ア。と。の。二。百。で。袂。の。明。る。ま。で。お。伽

をしくあげへまよ。~~~~~
そうやア粒強直どト然あま
あまら種んとまるを。社せりせどと引止らま。史よ
そこ 延小泊り。その聖物とを歩て。尾崎の宿を
らちこり。申渡のころらち渡り。目泊を紙て然
谷へ来し。以いも申刻以。かくて土をのりせんと。
諸瀬うらうら金持ぬ。身い旅の旅も昔小あふん夕風
さゆ海しき小。鶴巢まやゆきぬべし。あふ小羽の老を
糸。言渡町河津谷の巻あて。定めて二三日送るべし。されば

丁度ららぬ。出會苦どと考へて。後まてらる素うど
ゆ。羨ましく用の辨トる。まご迹小居るとやう。その程さ
ゆ計らまびと。一人ふ思接して。傍の茶店小尻らち
うけ「老婆さん大お異のう。ちのと濕りてゆ然いん
ど」モウけははらちまきません。まう「物前がをより
あまらう。お花去の商人流がけははらちやア。大おお通う
あまらう。あまらう。さぞお異らう。さぞうらやせらう。イヤ異らうて
ゆ。さくつてゆ。高きあう。是非が秘く。吾儕ゆま人

對疆たいきやうの乃の吹ふとときりりで日ひの書かきああん。方かた格かくああくくと入いで長なが
改か茶ちや代だいをを拵ぢひひててをを出い。足あし不ふ任にんしてしてああききけけるるがが計けい
吹ふとときりりのの色いろふふくくまま日ひの書かきうう。アア宵よひ月つきののああり
ゆゆせせばばととああくくどどそそままくく任にんいいああ。かかるる所ところ小こ黄わう昏こんままるる。
晴はるる空そら由ゆ夏なつのの僻ひそ暴あつふふ雲くもののちち掩おほひひ星ほしのの光ひかりアアも
ああららぎぎままるる。そのその暗くらききとと漆うるしののううくく。ままるる足あしささくく光あかり未み
ああままままでで恐おそ天あまのの間まゆゆつつええつつままるる。おおろろははととああるる来き
るる。風かぜりりううととゆゆ小こむむるる雨あめのの零ちり勝かち子こをを抛なるるままるるのの天あま酒さけううららむ

とまとまるるぬぬとと笠かさ傾かたむけけ。天あま窓まどのの掩おほへへどど水みづ滲しみくく。曇くもをを限かぎり
小こ妾めかけアアけけり

第六回

小源こげん次ついでのの場ば。五ご六ろく町ちやうををううりり妾めかけアアららがが。右みぎ祝いわままにに傍かたわらのの地ぢ
養やしやう堂だう。ちちううアアととつつららああるる火ひのの光ひかり。ここままどど地ぢ獄ごくでで佛ぶつのの間ま
ああままるるくくああららでで強つよ入いままるる昔むかしよりより筒つつ小こむむるる雨あめをを凌しのぐぐん
ととめめ小こ徨たぐむむ人ひとあありり。弓ゆみまま小こ提たらら小こ田でん糸いと挑ちやう灯とう笠かさ不ふ
てて面おもてのの定さだままるるああららねねどど。山やま形かたち小こ妾めかけのの字じのの得えままるるがが中なかつありり。

美由とさうと傍へより「ヤレくおあ招日雨舎とさ降
さうゆあくつて急不降出。彼小園とせきり中とトいひ
祝あげ教つて怖と「イヤおあひ須差さん。おまううモウ
四五日大かお日るぐ入まくとまトいをきて此方日教を
見て「イヤおあひ小深次さん。何し小今比くらもさ
を「母の年忌を勤めやうと。昨日の昼に服を貰つて
懸谷へ泊まらば宜のを。気が急まらんこの土手い夜路が
結句若らうと来と所がとみ又雨。イヤハヤ突不又ま
り

おうサ。若くあざうさひゆけた。おあ招不おあ不かりて。
此招不候。いしん招く大さ小雨ゆ小降おまう。モウきらい
るゆありまきとめエ。何ゆり雨の葉まを。性急ゆやア治
りつぎ。まご一里半ゆありませうう「左招。彼是との
位。ナニ見ううア近いのサ。まごやうく「雨刻半う。成刻ゆア
間があるう。雨せし止が教いあま。まア「あくおと。おせ下
あのもよ接る腰さげの趣いしぬ挑灯を。少く權め
吸つける折りぬの音流ぬま。小深次い面を出。「イヤ

夏のぬい妙ありんご。あが止りやまわし小。星が繁然見え
きて来り。史あり目形出りけりせう。アヤしく。昔の
後々こそさう。道中明くあり。有るさうとあア。サア挑
灯を粘ませう。十二とらやア昔併が持やせ。外小格別
あおのあり。トのひや出く先小立果のぬの漆水。右へ
除けまゝ左へ避て。往と既小十町居り。さの左小草
せひて。道の帳さく二筋小別。まてのり。後けまゝ。滑小
あて往悩む。馬も小い見えあるをう。尾花言。茅後けこ

どの小高き故小道あり。老若希へ挑灯を照。あがさう方に
傍り。かきくと身小障る。尾花を日けてあきかゝる小。ぬの若狭の
あちうと。挑灯小ありかまじ。道おのひきや火へ消て。其の裏暗
小あんと。とまるとさう。腰抱の燧を出さんとまる。おらう。
物を巾のいんぐ。小深次が。さる小狗を抱へ寝。右も小指さ
水の双柄由。遠まると。老若希。肚のあちうを。あけけ。嘘と
一雙左右のひり。拂ひ除んと。新をカ小任して。一さう。
若しき。息のゆきあ。む。さ。あ。何及と。七類八倒小深次。いせら

笑ひ「ま方を教まらぬの送極大をらら逢ざらうと
目算をう小姓とのが運の濁どその代目。法深の跡で可
もが。持来金まで山懐中。こらやア田町。こら
をさしと突飛せば二足と足暖巡り。そのま倒れ死を
げり。小源次らからさる。懐へ手をさすのまて。探さる
さる。胸巻を曳出でてさきありふ。己が腹小控しつけ
こと由邪魔ごとと血小流さし。腰指さ廻小抱り出
後をゆえぐしと立退く。大膽不敵の極悪人。いつある

因果の條をりて。命をさし金さし由。棄ひては縁
放後の巻小のりあり

作者のまらその翌朝土地のみの死骸を見つけ。大不
發きて莊屋小姓へまらり考物を改めつけ。小。莊屋
沙系釣掛少。絹屋をたを希との小。懐面あまは
招飛柳あて知らせ紙をふ。元来家族といふもの
あ。跡を護まる老生管の武去清の本文小のり
く。あらしね新業をあらう放法深がまきさる小

小差こさのひん。差さをひんが相生あひへとて出往いしる准しん依いを
あら。あらの二三日あら出い奇きしる。さらには跡あと小こ送おくりまるハ。新
来まの若きのと。十に五ある丁ぢやう雜ざとのこのとを望まて
夫あ小こ送おくりまる。並なら小こ民たみが方へまらせ。且かつ既い已い墟こる。世田ぢ
要ま人めが方へまらせしるけしと。遠とく行得ま小こ民たみある
ゆゑ。あらの場へい往いく。お民たみの後に彼處こゝへまらせ。さらには跡あと小こ送おくりまる
あらに在しる小こ民たみある。あらの来勢きやう小こ送おくりまる。更さら小この詮あら。さらには跡あと小こ送おくりまる
ハ。小民たみの血刀ちゆうを後の証と結取とり。死骸しかいの傍の香

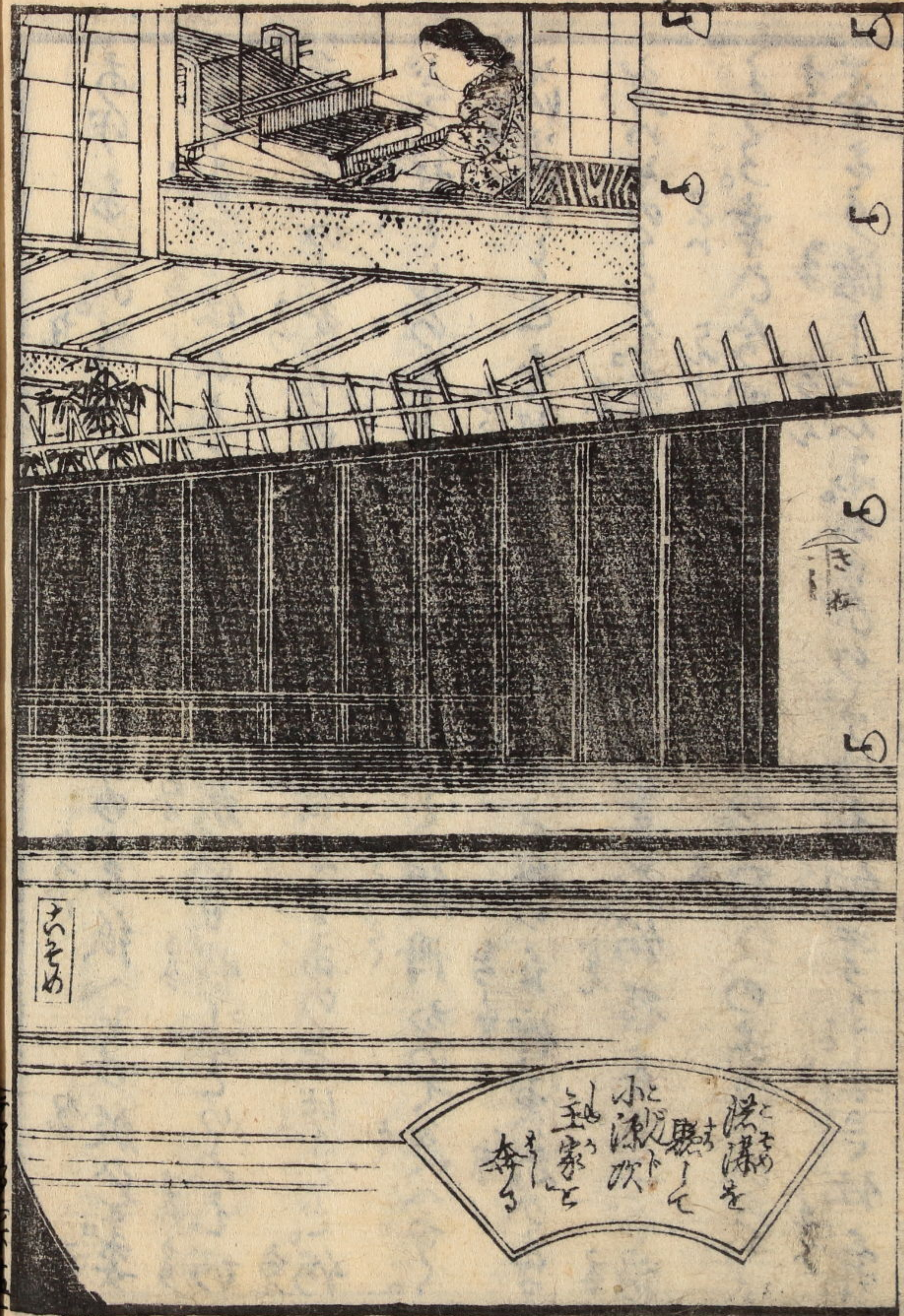
げあん。北あ一ぢの煙とあ骨ほねを捨ひて涙なみだあら。あらには跡あと小こ送おくりまる
あらに善提ぜん寺ぢやうあら。宗そう受じゆ小こ父ちち母ははの墓小こあら。あらには跡あと小こ送おくりまる
。七あ月げつの追福おとぎ。今いまのお民たみとお家いへのと遠とく行得ま小こ民たみある
おけに。さらには跡小こ送おくりまるの家の主人ぬしあら。あらには跡あと小こ送おくりまる
明ああら。あらには跡あと小こ送おくりまる。あらには跡あと小こ送おくりまる。あらには跡あと小こ送おくりまる
借かり。あらには跡小こ送おくりまるののちあら。あらには跡小こ送おくりまるののちあら。あらには跡小こ送おくりまる
差さを寄が。二あら交まらしあら。あらには跡あと小こ送おくりまるののちあら。あらには跡小こ送おくりまる
を憑。あらには跡あと小こ送おくりまるののちあら。あらには跡小こ送おくりまるののちあら。あらには跡小こ送おくりまる

再読小深決いの夜さる。思ひのどく仕課せて全さ
奪ひとりけまぶ。その翌日の夜去小春の一日二日狂ひ守り
まゆ程のうと桐生へ帰る母の幸忌を勤めつ。全さ
お深由まふくと。空深小程をいつ後ちまの史掃いそれ
とゆあうき。若い小奇特と契愛し。ゆく渠ふんを馳ま
かくて四五日を終るやど小。まゆ七夕小遊ぐと。何方由
おあど手向の待字廻冊紙や色紙とあまこ廻く母親ら
法深が於座へりら来り。サア廻冊紙が来ると決山来て

あげあさひ。於ひづのあさりのい。あま紙へその於ひを委
まぐまぐ伝ふまま。何根あ於ひの懐くといふ。え巧
真とうのあさりの仕方。百人一首小由あつとけまぶ。何
が種々むらうふ。あまとりあまぐる廻冊あいて契へゆく。
法深のこまを札小裁し。今母さあのは作あ。於ひあ
身のをこのを。あましくまて伝ふまま。何根あまの懐
まら。幸ひ今田の身の於ひ新らび踏一のあまら。んやいと
墨さる流し一ふふ。おのひりうけを細き小。まき仕森



小源次



小源次

洗滌を
小源次
到家
李

をり人の気勢。いそぎ机の下へ入る。振子むき。いそぎ
小深次が。徐々に入来る。深深なる小まき。て中。いそぎ
「このいそぎ。んと。身を及けて。知らぬ。教小深次の傍へより
そひ。お嬢さま。私が。何ぞのよう。と。是れ。お教。今日。いそぎ
招ふ。いそぎ。あ。い。抱。あ。く。教。ま。ま。と。い。は。れ。は。あ。ら。ぬ。と。あ。る。
ま。ま。く。い。方。を。お。向。あ。ら。い。外。で。あ。あ。の。亮。を。寄。ま。い。一。所
目。黒。子。の。裏。小。振。て。一。寸。内。証。で。ま。ま。い。と。使。が。来。ら。う
ま。ま。の。う。う。今。ま。ま。面。月。次。才。あ。い。が。教。ま。ま。深。深。小。別。と

あ。い。何。時。に。う。後。小。実。由。出。来。て。実。不。内。証。で。あ。ま。ぬ
時。宜。い。い。い。い。の。表。向。か。け。智。の。あ。い。一。個。娘。あ。ら。く。小。ま。き
い。せ。ま。い。ま。ま。い。小。世。深。ね。う。け。と。お。花。去。へ。連。て。迹。依
積。り。と。ま。い。人。由。承。知。の。と。昔。併。が。ま。ま。を。来。ら
と。を。通。を。さ。ま。ま。り。也。出。て。来。る。苦。あ。ら。く。何。振。由。大。あ
の。教。外。小。振。む。人。由。あ。い。お。あ。の。気。性。い。常。く。知。つ。て。る。
手。廻。て。呼。小。ま。ま。の。と。何。卒。深。深。小。内。証。で。左。振
云。て。い。い。と。い。い。は。目。が。著。て。の。と。と。ら。う。が。一。人。だ。い

出治まの。其処等由おあが如在あく。世結きて。其
らと。腹を割て。お教え。実の胆を洗。まう。ご。
男と。え。け。て。教。ま。ま。い。け。い。ひ。ひ。ぬ。昔。併。由。蔭。去。ッ。子。
その。也。ア。お。接。ト。あ。さ。い。ま。ま。あ。知。ま。能。く。や。ら。不。ま。り。
ま。せ。ら。と。清。合。て。来。ま。り。ご。併。お。あ。振。の。方。也。ア。
史。程。ま。で。由。あ。り。ま。せ。ん。う。ご。也。ア。昔。併。の。か。ら。む。
ふ。ト。初。を。巧。く。い。ふ。い。ん。ど。ご。知。る。ぬ。変。女。の。目。言。ふ。沙。汰。
が。あ。る。う。と。拍。不。候。の。杉。々。ま。ま。ま。拍。得。と。教。頼。と。一。ホ。ン。二

た。振。ッ。也。ご。方。重。が。受。う。ご。推。奔。り。の。と。忍。り。け。き。
ど。不。思。く。ご。う。う。初。あ。の。て。今。い。殊。小。燈。方。が。あ。い。
史。あ。り。昔。併。の。徐。く。と。脱。ま。で。不。准。依。を。ま。る。ご。ご。
方。ご。処。ま。で。連。て。往。て。一。ご。也。ア。世。と。由。お。接。ト。あ。さ。い。各。
ご。慈。母。さん。也。女。ど。由。小。曉。ら。ま。ね。へ。や。ら。不。あ。さ。ら。は。下。
初。登。め。て。ご。ら。ま。る。初。深。深。の。目。言。昔。併。を。候。と。よ。
外。小。由。け。い。ご。を。亡。命。ま。る。う。殊。不。う。り。モ。ウ。ご。の。家。の。見。
納。め。う。と。お。め。い。ご。の。悲。一。ご。の。標。場。涙。ご。の。落。涙。を。

源氏物語 卷之六

休ひつひ入いるるももとと弱よくくんんをを息いきああししいい友とものの物もの々々ふふ常とこ
のこの衣の後の二につつををろろりりをを等と張はねねぞぞ小こ景けいとと桐とう琴ぎん小こ若わくく
巧たくみみ一い百ひゃく兩りやう解かいりりとと是このの良よ人にんのの助すけふふとと只ただ管くだ魚い小こ踏ふ迷ま下げ
んの晴はるるのの黄わう昏こんささぎぎ時ときかかいいちちとと小こ源げん次じがが相あ馬ま小こ徐じゆとと庭にわ
口くちよりより思おもひひ出いででるる寶ほう門もん着あるる足あをを踏ふままりりてて小こ源げん次じ小こまま
をを曳ひままりり馬ば子こをを休やすままししてて奔はりりままけけるる

戀唄三人娘第二編卷之下終

